米国へのハワードの田園都市概念の導入経過とその成果の評価に関する考察

A study on the introduction of Howard's Garden City concept to America, and on the evaluation of the results

大坪　明　　武庫川女子大学　特任教授　　Akira Ohtsubo　　Designated Professor, Mukogawa Women's University

論文　研究報告

概要

米国では，シカゴはかつて田園都市と呼ばれていたことがあった。従って，同市が米国の田園都市のルーツであるという説もある。一方，E. ハワードは1898年にその著書「明日-真の改革に至る平和な道」で彼の田園都市の概念を発表した。その概念は運動として世界的に，そして米国にも広まった。その目的は，大都市の過密を緩和し，労働者の居住環境を改革し，そして労働者にも手の届く住宅を供給することであった。米国の多くの住宅改革派はその考えに共鳴し，20世紀初頭に幾つかの住宅団地をその考えに基づき建設した。多くの書籍の中でそれらは，居住環境の改善，安価に入手可能な住宅の供給等の考えの記述と伴に“Garden City / Garden Suburb”と表記され，そして田園都市の方針に沿っていると評価されている。これらの記述は，ハワードの田園都市の概念が米国に導入され，そして「田園都市の方針に沿った」社会改革が，例えその一部でも，実現された証左であることを示唆している。（なお本論では，ハワードの田園都市概念に関連する田園都市・田園郊外等を明確にするため，書名や引用文以外ではゴシック表記する。）

Summery

In the United States, once Chicago had been called “Garden City”. So, there is a discourse that Chicago was an origin of American Garden City. But in 1898, E. Howard expressed his Garden City concept in his book “To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform.” The concept expanded as a movement to abroad and also to the United States. Its purpose was to ease urban congestion, improve workers' living environment and provide affordable housing for workers. Many housing reformers in America were in sympathy with the concept and designed some housing estates based on it. On these housing estates in the early 20th century, many “Garden City / Garden Suburb” declarations with their concepts were described in many books. It is suggested that these descriptions proof the introduction of Howard’s “Garden City” concept into the United States and even partial realization of the “Garden City” concept and its purpose of social reform.

1. はじめに

田園都市の概念は，E. ハワード（Ebenezer Howard）の『明日−真の改革に至る平和な道（To-morrow: A Peaceful Path to Real Reform, 1898）』（1902年に『明日の田園都市（Garden City of To-morrow）』に改訂）をはじめ，A. R.セネット（Alfred Richard Sennett）の『田園都市の理論と実践（Garden City in Theory and Practice, 1905）』やT.フリッチュ（Theodor Fritsch）の『未来の都市：田園都市（Die Stadt der Zukunft：Gartenstadt, 1895, 1912）』と複数が発表された。従って田園都市“Garden City”を語る際に，厳密にはその何れなのか明確にする必要があるとの指摘が一部にはある。また，「田園都市」の呼称が20世紀初頭に大都市の過密や勤労者の居住状況の改善手法として意識される前に，米国で特定のコミュニティ名や都市の愛称に使われていたことも問題を複雑にしている。F. J.オズボーン（F. J. Osborn）はその状況を，「（前略）（離れて見ると驚異的な）シカゴは，その素晴らしい環境を誇り田園都市を名乗った。1850年に創建されたクライストチャーチは，ニュージーランドの田園都市として知られていた。公式に田園都市と命名された最初の場所は，1869年にA.　T.スチュワートにより始められたニューヨーク郊外のロングアイランドに在った。1900年までにこの他に米国の9つの村と1つの小さな町が田園都市と呼ばれていた；現在どの程度の数があるのか私は知らない。庭園が潤沢にある町としての– 美しい田園地帯に囲まれた庭の中の町と同義でその名を選んだハワードは，彼がそれを採用した際，ロングアイランドでそれが使われていることを知らなかった。（後略）」[1] と述べている。

ハワード以前に既に「田園都市」と呼ばれた米国の都市は，けしてハワードが構想した社会改革を目指すものではなく，主に単なる郊外住宅地だった。しかし，この呼称が定着していたので，「（前略）アメリカの田園都市思想は，かならずしもハワードの影響によって起こったのではなく，むしろ建国以来の「反都市主義」にルーツを持っている。（中略）20世紀前半，イギリスから田園都市論が伝えられるとアメリカが敏感に反応したのも，このような素地があったからであろう。（中略）アメリカとイギリスは相互に影響し合いながら，同時進行的に，田園都市論を中心とする現代都市計画の源流を形成してきたと言っていいであろう。しかし，アメリカが受け入れ展開してい

キーワード：E. ハワード，田園都市，田園郊外，米国，田園都市思想の導入と実現

Received 16 June 2016, Accepted 12 August 2016

ったのは，自立性のある田園都市よりも，田園郊外というべき郊外住宅地のほうであった。（後略）」[2] とも言われている。同説は，ハワードの**田園都市**概念が米国に導入されたこと自体を否定してはいない。また，『反都市思想』は既にローマ時代からあり，近代のユートピア思想や社会主義の出現も，都市的矛盾に起因した。更にハワードの**田園都市**は都市に対する対立命題ではなく，大都市の過密環境や無秩序なスプロール現象を改善する手法であり，都市の集密性・利便性と良好な生活環境の両立を図るものである。そのことは，「（前略）田園都市は計画モデルとして独特だが，その鍵となる要素は1880年代のロンドンの改革派の間で当り前の考えだった。田園都市は多くの人々がそう思っている様なロマン主義で反近代主義的・反都市的な理念ではなかった；ハワードが提供したものは，中景であり，都市の密度や都市生活の長所を犠牲にしない分散型集住地の新しい形だった。（中略）田園都市の支持者は，机上の計画から英国や米国で実際に建設されるコミュニティに変換する彼らの仕事の中で，ハワードの新しい都市スキームの共産社会主義的な面を捨てた。（後略）」[3] と述べられている。

更に後述する様に，シカゴが公園の系統的整備で都市環境を整えただけでは，都市の過密解消に多少は貢献するとしても，米国の住宅改革派も目指した『中・低所得層にも手の届く良好な居住環境の提供』という社会改革的目標は達成できない。例え米国の住宅改革派が，シカゴその他の米国固有の田園都市の存在を認識していたとしても，社会改革的意義を持つハワードの**田園都市**が米国に伝わっていたので，シカゴ等の都市を住宅地建設のモデルとしたとは考えられず，やはりそのモデルはハワードの**田園都市**だと考えるのが順当である。彼の**田園都市**概念の米国への導入経過とその成果の評価の整理は，米国の公的住宅供給への流れの一端を明らかにする点で意義が有る。

2. 研究の目的と方法

E. ハワードの**田園都市**概念（本稿ではその詳細には言及しないが）以外に，セネットやフリッチュの『田園都市』概念は，出版された以外に，世界的に広める努力がなされた痕跡を余り目にしない。もっともセネットの書物の内容の一部は，ハワードのそれ等とともに1907年に我国に内務省役人有志により紹介された[4]。その書でセネットの『田園都市』を取り上げたのは，彼らの努力の賜物だった。彼らが，両田園都市論，レッチワース（Letchworth），ボーンヴィル（Bournville），ポート・サンライト（Port Sunlight），独のクルップ社の社宅団地，シカゴのプルマン・タウン（Pullman Town）等を広く取材し，また英国の家屋の内容，住宅供給手法，塵埃・下水の処理，矯風節酒やリクリエーションの施設の在り様，更には救・防貧事業，幼児保育事業等を幅広く取り上げたので，同書は我国将来の住宅地建設・都市づくりに資する気概に満ちていた。

ところで，独・仏・蘭等の国々では**田園都市**協会が設立されて，ハワードの**田園都市**の導入を確認できるが，米国**田園都市**協会は短命で実績も残さなかった。しかし**田園都市**概念を援用したと言う住宅地が，第一次大戦前及び戦時中に建設され，戦後は米国地域計画協会（Regional Planning Association of America＝RPAA）の活動に引継がれたと筆者は考えている。

本研究は，ハワードの**田園都市**概念が20世紀初頭に米国に導入され，住宅地づくりに結実した経過とそれら住宅地の評価を明らかにすることを目的とする。研究方法として，田園都市や都市開発関連の書籍におけるフォレストヒルズ・ガーデンズ（図4,5．以降，引用文以外はFHGと表記）やその後の住宅団地に関する記述から，**田園都市**概念（都市の過密解消，低所得者の手が届く良好な居住環境の供給，コミュニティ強化手段の提供，等）とともに，それらを**田園都市**や**田園郊外**とする表記とその評価について調べ，**田園都市**に関する認識を確認した。

ところで，第一次大戦中の米国の緊急住宅団地開発に関しては，エドガー・アダムス・Jr.によるその米国の都市計画における位置づけに関する報告[5] 等がある。しかし，本論の様に特に同大戦前後の米国の住宅地開発における，低所得層向けの健全な住宅供給の意義に的を絞った研究は，探索不足かもしれないが，筆者の研究以外には内外ともに余り見かけない。

3. シカゴの19世紀の状況とハワードとの関係

シカゴでは，1830年代にミシガン湖とミシシッピー川を結ぶ運河の開削で土地開発が盛んになり，1837年に市に昇格し，鉄道の発達とも相まって交通の要衝として大都市に発展した。そして同市は街づくりに以下の様なヴィジョンを持った。「（前略）1830年代に，新生シカゴ市政府は“Urbs in horto”をモットーに採用し，そのラテン語は「庭園の中の都市」を意味した。この標語は将来ヴィジョンを示し，ほぼ2世紀間シカゴ市民は公園の整備と保護に結集し，そして同市の公園の多くは，重要な考えと社会運動の実験場に使われた。公園の多くは，全国的に著名なダニエル H.バーナム，（他の人名省略）等の建築家，都市計画家，造園デザイナーや芸術家によって独自のものとして創造・形成された。（後略）」[6]

シカゴ市は，公園を特徴とする街づくりのヴィジョンを持ち，市民が様々な地区で委員会を組織して公園計画を作成し，約2世紀近くをかけて公園を整備した。この様な展望による公園整備で，シカゴは『庭園の街＝Garden City』と呼ばれた。20世紀初頭には，ダニエル・バーナム（Daniel Burnham）等は公園で街を取り囲みブールバールで相互に繋ぐ壮大な計画（図1参照）を作成し，庭園の街としての整備を促した。

図1 Plan of Chicago 1909 by Daniel H. Burnham

ところで，ハワードは1871年の大火直後のシカゴで働いていて（1871-76年），同時期の生活体験が彼の**田園都市**に啓示を与えたとする説もある[7]。同説の『生活体験』の内容が不明なので，彼に啓示を与えたものを明確にする必要があろう。筆者は，この時期にハワードがスピリチュアリストのコーラ・リッチモンド（Cora Richmond）のサークルに参加したことが，彼の思想形成の一部及び後の運動に影響したと推察する。「（前略）コーラ・リッチモンドは，内なる疑問に十分気づいているハワードに，人生のより高い目的と，利他主義に人間性を向かわせている宇宙の力の作用を再確認させた。統一する力または目的が存在し，そして，人類がそれに応じて状況を準備しなければならないというハワードの永続する見方に，唯心論は関与した。リッチモンドの人生観は，世界に参加すること，そして悪と攻撃を認めないことを奨励した。（後略）」[8]

当時のシカゴでは工業化の進展とともに職住分離も進み，郊外開発が盛んになった。シカゴ南西部に郊外住宅地リバーサイド（1868-69年）が， F. L. オルムステッド（F. L. Olmsted, Sir）の設計で開発され，ハワードはこの開発を見たことを示唆する説もあるが，定かではない[9]。事実この開発は，郊外立地である点と屈曲街路（park way）の採用が，アンウィン（R. Unwin）やパーカー（B. Parker）の**田園都市**のデザインと共通ではあるが，ハワードが目指す『労働者の手が届く，良好な環境の住宅の供給』という**田園都市**の目標との重なりは少ない。ハワードの意識は社会改革に有り，**田園都市**に視覚的特徴を与えたのはアンウィン等であった。従って，ハワード自身がリバーサイドから**田園都市**の着想を得たとは考えにくい。

一方，ハワードは1876年に英国に戻るが，その数年後に鉄道車両製造業のG.M.プルマン（Gorge Pullman）がシカゴ南部のキャルメット湖畔に約1,600haの土地を求め，1880～84年にかけて工場と従業員住宅地が一体化した米国初の企業・従業員の町プルマン・タウン（図2，3）を建設した。店舗，銀行，図書館，劇場，郵便局，教会，公園，ホテルや娯楽施設も整備された。その町は，英国におけるボーンヴィル（1880年から建設開始，1900年時点で313戸）や，ポート・サンライト（1888年～）よりも建設が早い。プルマンは，工場の廃材を燃料に機械が動き，廃棄物や余剰材も活用が出来る町を設計した。ポンプは町の汚水をプルマン所有の近隣農場に送り，そこで栽培された作物は同町で販売された。同町はこの様に自立性の高い町であった。同町に関しては我国でも1905年に，「最も発達せる工業地には其処に小締とした職工社宅が澤山に在る、其の盛大なるものは（中略）恰も自治の一町村を有するが如く、別天地の小社會を形造て居るものがある、就中此の制度は、萬事に大仕掛主義なる米國に於て盛んに行はれ、其の有名なるものには、例のプルマン・パレス・カアの製造者たるプルマン工場に付属せる職工社宅の如きは、最も有名なるものゝ一であらう。」[10] と紹介されている。筆者は，むしろこの町をハワードが訪問し**田園都市**の着想の一端を得たと推察する。この点についてはブダー（Stanley Buder）も，「（前略）その町の世界的知名度，社会実験に対するハワードの永続的関心，それが受けた世間の注目，及び彼がシカゴ在住時にそこで釣りをしたことからその地域を知っていた事実は，ハワードが1884年に好奇心の強い多くの人々がプルマンを訪問した時に，それに加わったことを強く示唆する。（後略）」[11] と述べている。

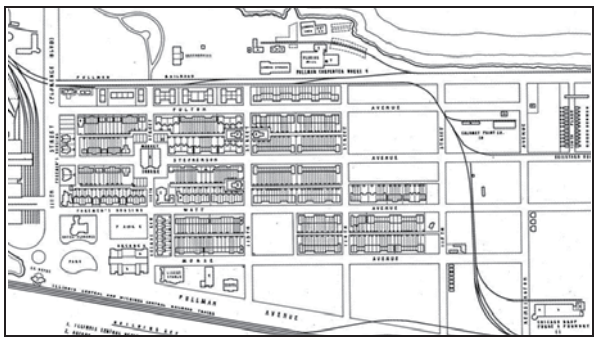

図2　General Plan of Pullman Town (Chicago)

図3　Pullman Town

4. ハワードの田園都市の定義とその概念の変質

ハワードは1898年に『明日--』を出版し，翌年に**田園都市**協会（The Garden City Association=GCA）を設立した。また1907年にそれを**田園都市**・都市計画協会（The Garden City and Town Planning Association=GCTPA）に改称し，都市計画法の成立にも努めた。1903年からのレッチワース**田園都市**の建設は，彼の**田園都市**論の現実性を世間に認識させた。ここで，彼の言う**田園都市**の定義を明確にしておく必要がある。レッチワースの住宅協会（Cottage Society）で若い頃に働き，第二次大戦後にニュータウンの推進者となったF. J.オズボーンは，「（前略）田園都市：都市的集住地を記述する一種としてのその名称は，彼（ハワード）がそれに与えた概念に基づいてのみ使われるべきである。彼と相談し，1919年にGCTPAにより短い定義が採用された，『田園都市は，健康な生活と産業のために設計された町である；社会生活を過不足なく営むことを可能にするが，大き過ぎない規模であり；田園地帯に囲まれた；土地は全て公有，あるいは同コミュニティのために受託されている。』（後略）」[12] と述べている。

これは簡潔にハワードの概念を示している。しかし，レッチワースに続く本来的**田園都市**の展開は困難を伴い，第二の**田園都市**は1919年のウェリン（Welwyn）の建設でようやく実現した。一方，アンウィンの協力を得たヘンリエッタ・バーネット（Henrietta Barnet）は，1906年にハムステッド**田園郊外**

（Hampstead Garden Suburb）の建設を始めた。それは**田園都市**運動と社会目的を共有したが，大都市ロンドンに依存する郊外住宅地であり，上述の**田園都市**の定義からは外れていた。しかし，この様な**田園郊外**の続出は**田園都市**運動の展開に大きな影響を及ぼし，自立都市の実現が捗らない中で，**田園都市**運動の展開として**田園郊外**や**田園村落**という選択肢が広がった。

また一方で，GCAは都市計画分野に関心を広げたので，同協会は本来の**田園都市**の建設から一層遠ざかる結果となった。GCA幹事のエワート・カルピン（Ewart Culpin）は，1913年の著書『最新の田園都市運動（Garden City Movement Up-to Date)』で『**田園都市**の方針に沿う（on garden city line)』という表現を用い，**田園郊外**や**田園村落**等の開発も包含したので，『**田園都市**の方針に沿う』ことが**田園都市**運動に含まれるという認識が一般化した。カルピンの定義を見ておこう。

「（前略）田園都市とは何か，に関する多くの歪められた考えと，田園都市・田園郊外・田園村落の間で起こった混乱に鑑み，それら3者の簡潔な定義を示すことは意味が有るだろう：

『田園都市』は自立的な町で，産業・農業・住宅がある－全体として計画された－そして少なくとも30,000人の人々に庭で囲まれた住宅を提供するのに十分な土地及び開けた緑地帯を占める。それは都市と農村の長所を結合し，農村を出て我々の過密な都市に傍若無人に入ってくる住民の流れを止める全国的な運動への道を開く。

『田園郊外』は，既存都市の普通の成長は健康な方針に沿うべきだと規定する；そしてこの様な都市が未だ過大でないなら，その郊外は非常に有用だ。そして，肥大し過ぎたロンドンの場合においてさえ郊外はそうであろう，しかし一方，郊外は農村地帯を遠くに追いやる傾向があり，そして農村の人口減少という根本的な悪に対処しない。

『田園村落』（例えばボーンヴィルやポート・サンライト）は，縮小版田園都市だが，給排水や電力をなにがしか近隣都市に依存する；それらは保護緑地帯の大切な用意が無く，通常は1つの大企業だけの中心である。（後略）」[13]

カルピンはこの『最新の田園都市運動』で，様々な**田園郊外**や**田園村落**も**田園都市**運動の実践の範疇に加えて紹介した。従って，都市の過密緩和のために都市域から外れた立地で，（必ずしも自立することは求めず），良好な居住環境とコミュニティを支える諸施設が整備された，低所得労働者にも手が届く住宅を提供する住宅団地を，『**田園都市**の方針に沿う』と考え，本論では**田園都市**や**田園郊外**の範疇に含める事にする。

5. 田園都市運動の国際的広がり

ハワードの**田園都市**運動は，GCAの設立時点から海外に開かれていた。1901年にバーミンガム近郊のボーンヴィルで開催されたGCAの第一回会議（Garden City Conference 1901）には幾人かの外国からの参加者があり，米国の建築家F. L.アッカーマン（Frederic Lee Ackerman）も参加していた。

「（前略）ハワードとアンウィンがいつ初めて出会ったのかは定かではないが，彼らは遅くとも1901年9月下旬までに，バーミンガム南西郊外にあるジョージ・キャドバリーの会社・従業員村ボーンヴィルで，キャドバリーが主催した田園都市協会の最初の英国会議で相互の尊敬の絆を築いた。（中略）地方自治体の多数の代表や，米国の田園都市の主要な主唱者になるフレデリック・リー・アッカーマンを含む幾人かの遠来の建築家など，およそ300人の派遣団が出席した。（後略）」[14]

また海外の**田園都市**協会は，1902年に独，翌年に仏でも設立された。この海外での運動の広がりを捉え，GCAは1904年7月に国際**田園都市**会議を開催した。GCAの活動に関しては，

「（前略）ハワードの原著自体は英国に限定されない広い関心が寄せられたが，海外からの問い合わせに対して明らかに中心となったのは田園都市協会の体制だった。情報を要求してくる手紙，直接にレッチワースや他の模範となる計画の進展を見に来た来訪客，協会が組織する会議と海外講演ツアーは，関連する団体に対するプログラムの重要部分となった。

1904年7月に初の国際田園都市会議がロンドンで開かれた。その当時，海外で中心的に関心を持ったのが，独と仏（各々は自国の田園都市協会を既に設立）そして米国であったことを同会議は示したが，手紙はブダペスト，ストックホルムそしてブリュッセルからも届いた。既に協会にファイルされていた他の通信は，日本，豪とスイスからの手紙が含まれていた。

田園都市協会は，欧州大陸メモという欄がある海外諸国との通信ニュースを定期的に出した。（中略）1906年には，米国田園都市協会が設立された（しかし，僅か1年しか存在しなかったようである)。（後略）」[15] と述べられている。

この様に，欧州を中心に米国や日本にも**田園都市**運動に関心を寄せる人々が居た。1905年にベルギー，1906年に蘭で**田園都市**協会が設立された。米国でも1906年に設立されはしたが，上記のように非常に短命に終わった。また，「明日の田園都市」は仏・独・露・スペインの各国で翻訳されて広がり，ハワードの**田園都市**運動は国際的な関心が増大していた。

一方，英国の**田園都市**運動は都市を計画し建設する方策に関連したので，先にも触れたように都市計画をその活動に取り込み，GCAは1907年にGCTPAと改称した。

「（前略）田園都市協会が，一旦都市計画法に関心を持つと，それは望む法律の請願活動に組織を早々に用いた。新しく見つけた焦点を強調するために，田園都市協会は1907年に名称を田園都市・都市計画協会(GCTPA)に変更した。もの事は思惑通りに進み，1909年6月に求めていた都市計画法が可決された。同法の制定が都市計画キャンペーンの終わりではなく，むしろ拍車をかけた。都市計画は，当時の田園都市・都市計画協会の新しい主なテーマとして公式に浮上した。（後略）」[16]

1909年に都市計画法（Town Planning Act 1909）が成立した翌年に，ロンドンで国際的な都市計画会議が開催され，英国を始め仏，独，ベルギー，蘭，伊，米そしてブラジルからも著名な都市計画家が集まった。そして，200名以上の参加者がレッチワースやハムステッド**田園郊外**を訪問し，大いに関心を示した。更に，1913年8月22日にカルピンが主導し，ロンドンのGCTPA本部で**田園都市**の熱心な支持者を世界中から集めて会

議が開催された（参加者：英9名，独4名，日・米・波・諾・仏各1名）。同会議では，新たな**田園都市**の国際的組織の設立が求められた。新組織をロンドンのGCTPA本部に併設することが同意され，引き続き設立委員会が立ち上げられて，ハワード，カルピン，イトウ・マサオ（大阪高等商業の伊藤真雄と思われる *cf.*：Garden City Movement Up-to-Date, p.72, 1914）他数名が委員となり，GCTPAの国際拡大版の国際住宅・都市計画連盟（International Federation for Housing and Town Planning=IFHTP）が設立された[17]。この様な結果，ハワードの**田園都市**や都市計画の概念は様々な国に浸透し普及した。

一方，セネットやフリッチュには自らの概念を普及させるこの様な努力は見られない。従って建築・都市計画分野で一般論として語る田園都市は，ハワードの**田園都市**を指すと言える。

6. 米国の田園都市運動に対する取り組み

米国では，英国のGCAの設立当初から，ハワードの**田園都市**に興味を持つ人々がいた。同協会の第一回**田園都市**会議（Garden city conference）に，米国からはアッカーマンが出席していたが，それは個人的参加だと思われる。更に組織的取り組みとして前述の様に1906年に一旦米国**田園都市**協会が設立されたが，経済変動等が原因で翌年に瓦解した。

「（前略）米国田園都市協会は，1906年にハワードと米国の聖職者と資本家グループにより創られ，同グループには英国国教会のヘンリー・C・ポター主教，ニューヨークの銀行家アウグスト・ベルモント，都市・郊外住宅会社社長のエルジン・D. P. グールド，そして英国国教会牧師でキリスト教社会主義のウイリアム・D. P. ブリスが居た。同協会は，自らモデル都市を提示するのではなく，むしろ実業家に如何にすればハワードの考えを取り入れた新しい町を計画できるかをアドバイスした。『労働者に提供しうる最良のものは，田舎の町の良い家での堅実な仕事である』とそれは宣言した。

1907年春にブリス博士は協会が調査・承認し，諸会社がロングアイランド，そしてニュージャージー，コネチカット，ペンシルバニアとヴァージニアの各州で町を造る予定だと発表した。協会は，全体で37万5千戸が，健康的でしかも美しく，各戸が其々庭を持ち，各近隣地域に公園・遊び場・学校・教会・クラブハウスや図書館がある都市周辺地域への転居を望んだ。しかし1907年の財政危機や別な浮沈で同協会の大仰な予定は萎え，そしてハワードが想定した様な田園都市は，この善意のグループの後押しで生まれることはなかった。（後略）」[18]

一方，前述の1910年のロンドンにおける都市計画会議では，米国の建築家・造園家などが英国の**田園都市**の創始者たちと顔を合わせ，発表をした。「（前略）1910年のロンドンでの都市計画会議（Town Planning Conference of 1910）では，英国のP. ゲデス（Patrick Geddes），ハワード，アンウィンや，独のエバーシュタット（Rudolf Eberstadt），ステュッベン（Joseph Stübben），A. ブリンクマン（A. E. Brinckmann）と米国のバーナム，ロビンソン（C. M. Robinson）が会った。ここでアンウィンはレッチワース田園都市やハムステッド田園郊外及び1909年の都市計画法を論じ，バーナムは都市の民主的政府の重要性に触れ，合理的な水の利用，大気汚染を減らす清浄な燃料の使用，そして都市拡張地域での公園の必要性といった環境面を強調した。また彼はコロンビア博覧会の積極的影響について語った。（後略）」[19]

ここでの，米国のダニエル・バーナムのコロンビア博覧会に関する発表は，都市美運動がパリ市のオスマン（Georges-Eugène Haussmann）による都市改造に端を発する象徴的形式美を重視したものなので，町の自然な風情を重視するアーツ＆クラフツ運動等と通底する**田園都市**のデザインの方向性とは噛み合わない様に思うが，都市計画について幅広く議論した点では有意義だろう。ただし，米国人のIFHTPの会議への参加は，組織的継続的ではなく，以下に述べられている様に，むしろ個人的で一時的なものに終わることが多かった様である。

「（前略）戦前に米国人は国際住宅・都市計画連盟（IFHTP）の会議で，比較的大きな外国人の一団を構成した。大部分の他の国の参加とは異なり，米国の参加者は，中心組織に集まったわけではなかった。『田園都市と都市計画』の報告書では，牧師のジョシア・ストロングやリチャード・ワトラスのような個人が，彼らが代表した組織よりもむしろ目立つ。米国人の存在の安定した連続性は少なかったようだ。（後略）」[20]

しかし19世紀中頃から米国において，低所得者や労働者の住宅の悲惨な状況を改善しようとする動きとして，基準の強化等様々な考えが出現したが，その動きは20世紀にも引き継がれ，20世紀初頭にはそこに**田園都市**の考えが加えられたのだった。

7. 米国でのハワードの田園都市概念の初期の展開

本節では米国の20世紀初頭に建設された幾つかの住宅団地の記述中で，『過密の解消』，『労働者にも手が届く良好な環境の住宅の供給』，『コミュニティ活性化手段の提供』，『総合的デザイン』等の**田園都市**の方針，及びそれに基づく『**田園都市**／**田園郊外**』という表記により，当該団地が『**田園都市**又は**田園郊外**に相当する』という建築・都市計画上の認識を確認する。

米国では，1901年のGCAの第一回大会以来，多くの米国人が**田園都市**関連の会議に参加し，あるいは**田園都市**や**田園郊外**の現地を訪問し，英国と連携しながら**田園都市**に関する認識を深めた。米国**田園都市**協会は一旦結成されたが，前述の様に短期間で瓦解し，米国では**田園都市**に係る組織的な動きは無くなった。しかし個別に**田園都市**思想を体現する動きは継続していた。初期の事例で言えばFHGの試みなどがそうだと考える。

FHGは民間企業が社会改良の意識を持って計画したものであった（表1①参照）。同団地は世間からは理想郷実現を目指す『米国の**田園都市**』と見られていた。その全体計画を行ったF.L.オルムステッド, Jr.が，ラッセル・セイジ（Russel Sage）財団の事業面のマネジャーであったデ・フォレスト（de Forest）から，同計画への参加を要請された時に，彼は欧州の**田園都市**や企業・従業員の村（industrial village）を視察していた。即ち，**田園都市**に大いに興味を持っていたと言うことである。また，デ・フォレストは同団地の経営に関し，投資に対

する配当に上限を設けることで，住宅水準やデザインを一定以上に保ちながら，併せて建設方法の合理化等により，資本主義体制の中でも**田園都市**の理想と事業が両立し得るという一定の目論見を持っていた（表1②参照）。 FHGは真正の『**田園都市**』や『**田園郊外**』ではもちろんないが，同事業にはデザインを含めて，ハワードの理想の一端だけでも実現しようとする意図があった。そして『社会改良に対する投資』に興味を持ち，同団地が『根本的社会変革に対する関与が不足していた時代の例外』として，カルピンの言う『**田園都市**の方針に沿う』居住環境を提供しようとした（表1③参照）と考えられている。 即ちFHGはハワードの考えに影響され，その実現を目指した『米国の最初の**田園都市**』と言われていること（表1④参照）が，これらの記述から確認することができる。

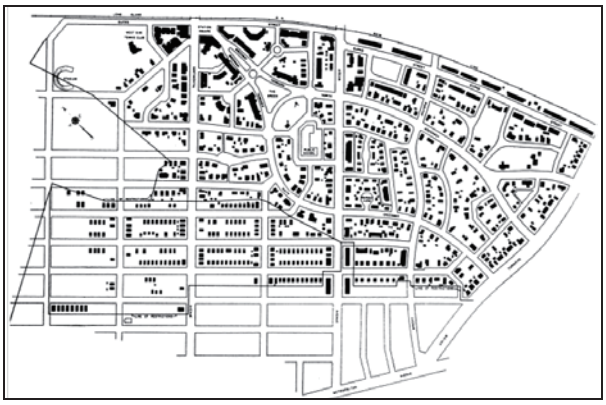

図4　General Plan of Forest Hills Gardens (N.Y.)

図5　Forest Hills Gardens (N.Y.)

米国では，1913年にはカルピンを招いたレクチャー・ツアーが開催され，いくつかの地方で市民の改革グループが設立された。カルピンが快く招聘に応じたことは，同年のIFHTPの第一次大戦前の会議への米国人の注目に値する大量出席に繋がったと推察できる[21]。この様な経過の中で，**田園都市**の精神とデザインは米国に浸透していったと考えられる。

また，都市部では19世紀後半からの経済活動の活性化に伴い人口が集中し，20世紀初頭には住宅不足はかなり顕在化していた。これは，当時の住宅での現代的供給処理設備の充実，建材や人件費の上昇，住宅投資の低迷等が原因だった。第一次大戦が勃発すると，生産活動が停滞する欧州向けの製品増産で労働者が都市に一層集中したので，住宅不足が更に顕著になった。

表1　Descriptions on the Forest Hills Gardens

①社会改良意向[22]

（前略）米国は，ハワードの考えに影響された多くの開発を行うことになった － レッチワースの居住環境を反映する田園郊外やガーデン・ヴィレッジだが，支える工業地区が無く，そして必然的に大部分の労働者階層の家族には余りにも高価だった。最初の田園郊外の一つは，フォレストヒルズ・ガーデンズ（ラッセル・セイジ財団のプロジェクト）で，その経営委員会は『社会改良のための投資』に興味を持った。同財団は，（中略）ニューヨーク市クイーンズ区で160エーカー余りの土地を購入し，同プロジェクトを建設するために，年内にセイジ財団住宅会社をつくった。（後略）

（下線筆者，以下同じ）

②田園都市としての認識[23]

（前略）1910年11月に，アトランタ・コンスティテューション紙からペオリア・スター紙まで，サンディエゴ・サン紙からテキサス州デニソンのヘラルド紙まで国中の150紙以上の新聞が，フォレストヒルズ・ガーデンズと言われるモデル郊外住宅地の建設計画に関する記事を掲載した。『米国の田園都市』とニューヨーク・サン紙は発表した。それは『伝統的表現の現代のエデンの園，良すぎて信じられないおとぎ話』とニューヨーク・トリビューンが伝えた。（中略）

彼の欧州旅行の主目的は，独，仏，英で都市計画家，建築家や自治体職員に会い，それらの国の新規の田園都市とモデルとなる企業・従業員村のいくつかを訪問することだった。（中略）オムステッドの旅は，19世紀後半の社会及び都市の偉大な理論家エベネザー・ハワードの本拠の英国に達した。（中略）デ・フォレストは，オルムステッドにセイジ財団の同不動産事業に参加を求めた時に，共用街路，共用公園と共用緑地，魅力的な住宅と，十全に管理された私庭があるコミュニティという，田園都市のこのイメージを持っていた。デ・フォレストは実際的な考えを持つ事業家だった。（中略）ハワードの土地共有の考えは，米国には非常に急進的だと承知していた。その政治的イデオロギーを削ぎ落としたが，英国の田園都市は投資に対する固定利回りの配当が意図されていたので，米国の民間企業に訴求することができた。デ・フォレストは，コミュニティの計画とデザインの高い基準を提示し広める実験は，もしそれが郊外の不動産開発に目覚しい影響を与えるなら，経済的に堅実で利益を生む事業になると考えていた。（後略）

③ハワードの考えとの相違と同調点[24]

（前略）ロングアイランド鉄道でマンハッタンから8マイルの距離にある農地に，建築家グローブナー・アタベリーにより1911年に趣味豊かに設計されたフォレストヒルズ・ガーデンズは，レッチワースでのパーカーとアンウィンの精神を反映していた。

この新コミュニティで，空地や，個人でなく共同利用に当てられる多くの土地を保証する原価を十分に削減するために，住宅は十分に密集して建設される予定だった。買い手の対象である労働者は，こうして自然との接触で元気になるだけではない：彼らには交流のあらゆる機会があり市民の絆を深める。中央の購買施設は人々の交流を更に強化する。このアプローチはオーストリアの建築家カミッロ・ジッテの影響を受け，ハムステッド田園郊外のためのパーカーとアンウィンのデザインを通して伝えられ，グローブナー・アタベリーが『総合的デザイン』と呼んだものだった。（中略）しかし，ここはアメリカだった。ハワードが彼の理想都市を心に描いた土地共有に代わり，土地区画は個々に購入され，そして投機的住宅市場には控え目だったかもしれないが，投資家は利益が保証されることになっていた。結果的に，同実験は目論んだ様には低所得労働者の手が届くものではなかった。しかしまた，ハワードの，そしてそれには敵わないが新コミュニティのためのラッセル・セイジの計画の背景として，都市を更に住み易くする必要性を認めたのと同様の根本的な社会変革に対する関与が不足した時代に，同実験は例外があることを証明した。（後略）

④ハワードの考えの明確な影響[25]

（全略）都市に関する進歩的考えは、20世紀前半における更に魅力的な郊外開発に翻案された。1898年に英国の著者エベネザー・ハワードによって明確に表現された田園都市の概念に影響されて、米国のプランナーは、小売店舗、余暇及び住居という構成要素を用いて、ほぼ完全な郊外開発を構想し始めた。ニューヨーク州は米国初の田園都市、父の後を継いでランドスケープ・アーキテクトの分野に入ったフレデリック・ロウ・オルムステッドJr. によって計画されたフォレストヒルズ・ガーデンズの生まれ故郷になった。（後略）

米国が参戦した1917年に，この住宅不足の対処策を調査するためにAIAジャーナル編集長のホイッタカー（Charles Whitaker）は，**田園都市**会議に参加したF. L. アッカーマンを英国に派遣し，住宅供給の諸手法と国の役割及び英国の戦時緊急住宅供給の事例を調査させ，報告が1917年のAIAジャーナルに連載された。同記事は，**田園都市**運動や住宅・都市計画法の成立，レッチワース等の建設に触れた上で，米国では戦前の住宅供給手法は戦時の緊急手段としては有効でなく，政府の財政的関与が必要だと報告した。彼は米国の緊急住宅供給でも，英国の**田園都市**や**田園郊外**の様に公有/共有という所有形態，及び十全に計画されコミュニティ施設を持った住宅団地は，労働者の勤勉さを引き出すであろうし，更に投資した将来価値が保証されると示唆した（表2①参照）。そして戦争の進展と伴に，軍需産業労働者の住宅不足が戦争遂行の支障になると認識した政府が，その対処策として緊急商船公社（EFC=Emergency Fleet Corporation）の住宅部署と米国住宅公社（USHC=United States Housing Corporation）を設立した。一方，開戦により独や墺が離脱したIFHTPは，**田園都市**原理を適用した戦時住宅地建設に関する米国からの報告を伝えた（表2②参照）。 そして1918年4月からEFC，6月からUSHCにより住宅供給支援が開始され，**田園都市**をモデルとした多くの住宅団地が建設された（図4，表2③参照）。F.L.アッカーマンはEFCの建築部長に就任し，上記のE.リッチフィールド（Electus D. Litchfield）とH.ライト（Henry Wright）はキャムデン（Camden）でのEFCのヨークシップ・ヴィレッジ（Yorkship Village，図6）を設計した。そしてリッチフィールドはその想いを表2④の様に記している。更に，アッカーマンは前述の英国視察で，彼の地の住宅の奥行が浅く，全ての部屋に採光と通風・換気がもたらされている状況を確認したことから，住戸自体の環境性能の重要性を認識し，EFCが設計する住宅に関しては表2⑤の様な快適性の提供を主張した。更に，USHCの都市計画部長だったオルムステッド,Jr.は，戦時団地を戦後に表2⑥のように評価し，世間でも同⑦の様に評価されている。

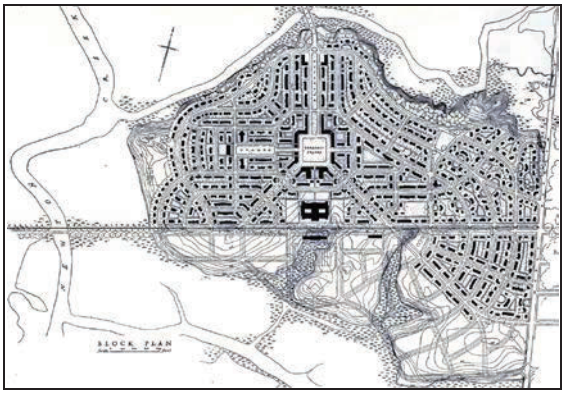

図6　General Plan of Yorkship Village (Camden)

大戦後の都市計画は，基本的に経済原理と専門化により規定され，米国**田園都市**協会をキリスト教関係者が設立した時の様な宗教的同情心の入る余地は少なかった。戦後にIFHTPの活動に各国が復帰すると，米国からのプロの建築家・都市計画家が，都市計画と住宅建設のアイデアを，国を越えて交換した。その様な中で，戦時にEFCのユニオンパーク・ガーデンズ（Union Park Gardens）を設計したジョン・ノーラン（John Nolen）は，早くに**田園都市**の理想の米国への適用を試み，戦後も同様の活動をした。彼はマリーモント（Mariemont）の

表2　Articles on the housing supply during the First World War

①事前調査の報告[26]

（前略）軍需工場の近くで更に居住施設を開発するコミュニティはどこでも，そこに提供するために政府は別部門また非営利の政府系企業を組織する必要がある。同組織は先に示された権限で，土地取得，新たな集住地の計画，道路・下水・給水・電力の整備，住宅建設，そしてこれらのコミュニティが要する文化施設等を建設する必要が有り，またそれらを別の管理者に移管するまでの間，同資産の管理を要する。（中略）適切な住宅・コミュニティ施設が用意された計画的コミュニティが，楽々と勤勉さを引き出すことは大いにあり得る。この提案は，理論の1つではない；それは，英国の田園都市と田園郊外の中で一般的に使われている実践を，若干の修正はあるが，実行に移そうとしているだけだ。このスキームの利点は，我々がこの時期の所有権と将来の管理の複雑な詳細を決める必要がない点にある；そしてこの方法の成功は，単にこれらのコミュニティが達成する完全さの程度に依存する。それらが上手く計画され，上手く建設され，上手に組織されるならば，投資の将来価値に関して何の疑いもない。（後略）

②田園都市原理の適用[27]

（前略）戦争で幾つかの接触は絶たれたが，それ以外の連携は維持され，幾つかではむしろ強化された。田園都市・都市計画協会の定期刊行物『田園都市と都市計画』は，田園都市の枠組みが少なくともいまだに欧州で瞬いていることを示すために，海外の報告を載せた。しかし最も楽観的な報告が最前線から離れた地域からもたらされた。大西洋の向こうのアイデアや人物の往来が増え，そして1917年から国際住宅・都市計画連盟は米国政府が田園都市の原理を軍需産業労働者の戦時住宅に適用しようとする考えを報告できた。（中略）J. H. グリーンヘルフとP. W. ウィルソンは田園都市の信念を説くために，スライドを携え米国を旅した。（後略）

③建設団地への田園都市のアイデアと改革課題の適用[28]

（前略）ミカエル・ラングは，都市計画の先駆者フレデリック・アッカーマンの第一次大戦中の緊急商船公社の計画的な住宅団地に対する巨大な貢献に光を当てた。アッカーマンはエレクタス・リッチフィールドと若いヘンリー・ライトの助けを借りて，英国の田園都市アイデアと社会主義の改革課題をアメリカ合衆国の労働者住宅の開発に適用した。（後略）

④設計者の想い[29]

（前略）我々は新しいユートピア― あらゆる年代の哲学者が好んだ夢の実現 ― の建設を望んだのではないが，労働者の確保が困難で，皆が同意するであろう本当の米国の市民権の発達にとり実際に不可欠なそれらの住宅に，機会を提供するコミュニティ建設を我々は望んだ。（後略）

⑤住戸性能の改良[30]

（前略）アッカーマンは1917年に，英国の戦時公営団地及び彼らのニュータウンの先例を評価するために，英国に派遣された。これらの開発は一般的に，奥行2部屋分で，全室に光と空気が確実に入る様にするために通りと平行に建設された住宅を提供していた。当時の大部分の米国都市の過密なテネメントとは対照的なこれらの開発の健康面に感動し，すべてのEFC団地がこの快適性を提供する，とアッカーマンは主張した。（後略）

⑥当事者評価[31]

（前略）学ぶべき対象の一つは，幾つかの住宅プロジェクトの，物としてのそして社会面・経済面の質の問題に関わっている。それらは限られた財産しか持たない人のための快適で健康的で楽しい生活環境を追求する道中で，手に入れることが出来る最良の結果を保証する方向を向いた，例え緊急であったとしても大規模で理性的な試みである。（後略）

⑦世間の評価[32]

（前略）これら二組織又はその代理の民間企業により建設されたコミュニティは，田園都市の方針に沿い，望ましい生活環境を提供する機能的道路パターン，空地，住宅やコミュニティセンターを融合させた計画だった。都市計画，建築，デザイン及び住宅建設の進歩した技術は，低・中所得層の住戸を彼らのごく身近な所で相当量供給をすることに成功したと紹介された。（後略）

プロジェクトでは，下層・中流層の人達が入手可能な良質の住宅を供給するという施主の想いを形にする中で，アンウィンのデザイン手法も援用した（表3①，図7参照）。

表3　Descriptions on Mariemont designed by G. Nolen

①設計者による田園都市思想の受容[33]

（前略）ハワードと都市デザイナーのレイモンド・アンウィンが唱導した英国の田園都市運動は，概ね1900年前後の欧州の工業都市の環境の荒廃と（労働者の居住に）適切な場所を欠いている事態に対する最も早い対処だった。ジョン・ノーラン（1869-1937）は，米国で最も早く田園都市の理想を受け入れた米国人の一人だった。（中略）概ね1920年初頭に，ジョン・ノーランの事務所は都市美運動からの公式的軸性を持つ道路パターンと，田園都市運動の楽しげな曲線を用いた道路パターンを重ねた独自の手法を採用し始めた。（中略）オハイオ州のマリーモントはノーランによる米国最高の田園都市である。マリーモントはシンシナチの成功した実業家の未亡人マリー・エメリーのために開発された。彼女は下層・中流層の米国人が入手可能なコミュニティと住宅の質の問題への対処を探求した。彼女の管財人でマリーモント計画のディレクターのチャールズ・リビングウッドは，英国の田園都市ウェリン，レッチワース，ポート・サンライトを何度も訪れ，ノーランによって組織された全国的計画会議に参加し，田園都市の上手くいった点を全て取り入れた「国の模範となる」モデル都市を設計するために，最終的に1920年に仕事を彼の事務所に依頼した。（後略）

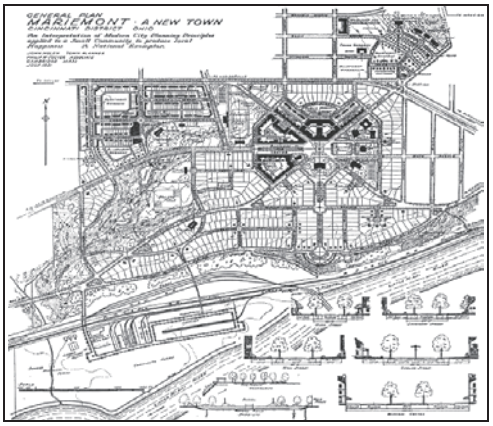

図7　General Plan of Mariemont (Ohio)

8. 受けている評価

以上，ハワードの**田園都市**の定義及びその解釈の拡大，米国における第一次大戦前後の『**田園都市**の方針に沿う』住宅団地を見てきたが，それらは主にデザイン面が支持されたという見方がなされている（表4①参照）。それに関しては，FHGの注意深く作り上げられた環境が，米国の他地域とは非常に異なる印象の存在であった点からも理解できる（表4②参照）。更にFHGは，第一次大戦後に展開された米国独自の田園都市理論の重要部分となる近隣住区理論を生む素地をつくり，米国都市計画史上で重要視されている（表4③参照）。また米国住宅公社の住宅供給に関しては，やはり理想を追求したものと認識されていた（表4④参照）。一方，後の都市計画家は，都市化の進展に伴い都市が非人間的だと感じられる様になった1970年代に，ハワードや**田園都市**及び20世紀初頭の**田園都市**の方針に沿った仕事を再評価した（表4⑤参照）。また，住宅改革という面からは，人により都市美運動や米国の**田園都市**運動（これは恐らく1年で瓦解した**田園都市**協会の活動を指すと思われる）を評価せず，戦時団地を大きく評価している（表4⑥参照）。

表4　Evaluation of “on garden city line” housing estates

①米国で人気がでたデザイン[34]

（前略）皮肉にも英国の計画史家F. J. オズボーンが観たように，ハワードの仕事は「全ての現代語に新用語（Garden City, Cité-Jardín, Gartenstadt, Ciudad-jardín, Tuinstad）を授け，そしてこの用語はハワードにより最も厳密な意味を与えられたが，それが持続的に使われた所ではどこでも，実際，著者の定義に反して全く異なる感覚で用いられてきた。」ハワードの田園都市モデルは理論であり，視覚的特徴を与えはしなかった。（中略）実際ハワードは，社会経済的な変化を促す手段のデザインにのみ興味を持っていた。田園都市にその視覚的独自性を与えたのは，英国の建築家兼都市計画家のR. アンウィンと彼の仲間の建築家B. パーカーだった。そして，欧州と米国で人気が出たのは，ハワードの社会経済的理論ではなく，パーカーとアンウィンの計画概念と魅力的なアーツ＆クラフツ的美学であった。（後略）

②FHGのデザインの評価[35]

（前略）フォレストヒルズ・ガーデンズは，政治的，社会的，そして芸術的改革に対する望みが高まった時に考えられ，そしてその望みの象徴として認められた。オムステッドとアタベリーが相互啓発し合ったデザインの協力関係が，現代の訪問者が『魔法によって異国の…まるでアメリカでは無い様な，若干ロマンチックな領域に足を踏み入れた』のではないのかと不思議に思う様な，『典型的なアメリカ郊外の硬苦しく単調な印象』とは異なる環境を作った。（後略）

③FHGとクラレンス. ペリー[36]

（前略）フォレストヒルズ・ガーデンズはアメリカの都市計画史において重要な存在だが，それが最初の田園郊外の一つであったからというだけでなく，C. A. ペリーがそこに住んでいる間に，彼の近隣住区の概念の発想をやがて発見した考えを開発したからであった。近隣住区は田園都市の理想と同じくらい都市計画家により広く受け入れられた構成概念だった。もちろんペリーは，オムステッドのモデル的近隣地域の物理的特徴のいくつかから恩恵を受けていた。

④米国住宅公社の住宅団地の総合評価[37]

（前略）米国住宅公社により提案された住宅団地開発は，真のユートピアあるいは完全な社会として伝統的に定義されていたものとして考えられた訳ではなかったが，それらは当時の進歩的な美学・哲学で不朽にされた多くの理想主義者の考えを反映した。ルイス・マンフォードが，極端な理想主義または楽観主義の時代だと考えた第一次大戦以前の時期は，工業化された都市が引き起こす問題の修正を目指した理想主義者の，多くの計画を生みだした。エドワード・ベラミーの『顧みれば（Looking Backward）』やウィリアム・モリスの『ユートピア便り（News from Nowhere）』等のいくつかの非常に影響力のある文学上のユートピアに加え，英国の田園都市運動はこれらの社会での同様な道徳的ジレンマに対処し，そしてまた，全く虚構の領域で提案されていたユートピアと比べて，更に現実的な解決を示唆している。これらの理想主義者やエセ理想主義者の多くの計画の中で一層強化された理想の目標は，貧民層の状況の改善を通して，工業都市の分散，地方主義の推進，日常生活への自然の導入，そして文化の高揚が含まれていた。1994年の『不完全な未来-アメリカにおける技術の複合的恵み（Future Imperfect, The Mixed Blessing of Technology in America）』で当期間のユートピアを分析したハワード・シーガル（Howard Segal）によると，マンフォードは真のユートピアと，その代替としての都市と都市計画の開発の関係に気づいていた。シーガルはこれを『批判的理想主義』，または代替もしくはより良い解決策の提案によって既存社会の批判としてユートピアを利用することと呼んだ。米国住宅公社の計画と目標と活動を記録した諸刊行物は，同様の方法でそれらが仮設住宅における単純に実用本位の試作以上のものを目指したことも示した。（後略）

⑤ハワードや田園都市の再評価[38]

（前略）1960年代に出版された歴史の概要は，折に触れて，その田園都市とニュータウンの考えが英国の改革努力と，最終的には米国の都市計画の形成に貢献したE.ハワードやR. アンウィンの様な英国人に光を当てた。（中略）都市計画の知的起源を再評価する努力の一部として，都市と都市計画の歴史家はE. ハワードの田園都市の改革スキームに一層注目し，同様に伝統に学ぶ都市計画の動きがジョン・ノーラン等により設計されたプロジェクトの長所を再発見していた。（後略）

⑥米国の都市美運動・田園都市運動と戦時住宅供給の評価[39)]

（前略）『都市コミュニティ：進歩主義の時代の住宅供給と都市計画（1967）』の中でルバブは，住宅供給と都市計画の間の連携について余り評価をしていなかったものを，一層控えめにした。彼は都市美運動と住宅供給の関係を『最小限』と特徴づけて，米国の田園都市運動を『ほんの少ししか前進しない』と切り捨てた。同書のあちこちで彼はより頻繁に住宅供給に対する都市計画の意義を『限定的で間接的』であると記述した。（中略）戦時住宅団地それ自体が重要だった。戦時住宅団地の開発の計画は，アッカーマン，スタイン，ノーラン，ライト，ロバート・コーン，オムステッド，Jr.ならびにストークスを含む住宅供給と住宅地計画の多数の先導者が参加した。ルバブは，『総合的コミュニティ』の建設，美と衛生の標準が出会った労働者階級のコミュニティの建設を『投機的営利追求の建築業者より非常に優れている』と，彼らの貢献に賛辞を送った。大部分の第一次世界大戦の住宅団地がニューヨーク，キャムデン，フィラデルフィア，そしてメイン州バースのような所に建設されたが，戦時の苦労に影響を及ぼすにはあまりに完成が遅かった。大規模で，申し分なく設計されたコミュニティ，田園都市の原理に従う曲線の街路・建築的に味がある連棟建ての列状住棟・広い空地を特徴とし，そしてすぐに良好な住宅供給及びコミュニティ開発のモデルとして役立った。（後略）

総合すると，米国での**田園都市**の方針に沿う住宅団地は，そのピクチャレスクな点で人気が出た面もあるが，社会改革の理想を多少とも実現する動きだと言う理解と評価も確認できた。

9. 結論

米国では19世紀後半頃から，都市のスラムやテネメントに代表される低所得者層の劣悪な居住環境改善の動きが，徐々に現れていた。一方，シカゴは田園都市と呼ばれていたが，それは単に同市が公園を都市整備の中心に据えた街づくりを目指したことにちなむ命名であり，『都市の過密やスプロール解消』，『低・中所得層にも手が届く良好な居住環境の提供』等を目指すハワードの社会改革的**田園都市**とは異なるものであった。同市に滞在した時に，ハワードがこの様なシカゴに**田園都市**の着想を得たというより，当時彼がコーラ・リッチモンドと交流し天命の啓示を受けたことが，彼の後の行動に繋がったと推察する。更に，彼の帰国の少し後に建設されたシカゴ郊外の企業・従業員町プルマン・タウンは自立性の高い町で，筆者はむしろここを彼が訪れ，**田園都市**の着想の一端を掴んだと推察する。

一方英国の**田園都市**運動では，ハワードが提唱した真正の**田園都市**の実現が，レッチワース以降は余り順調に進まなかったので，『**田園都市**の方針に沿う』**田園郊外**や**田園集落**も**田園都市**運動の範疇に含む様に概念が拡張された。更にその**田園都市**運動は，積極的に国際的な広がりを求め，1904年の国際**田園都市**会議からIFHTPの組織と国際会議へ拡大されていった。米国からも当初からこれらの会議に人々が参加し，特に住宅改革派はその考えに賛意を示した。その様に**田園都市**運動が広がりを見せる中で，特に米国ではハワードの**田園都市**概念の中に色濃く存在した共産社会主義的側面は捨象され，米国の社会状況に適合させて展開された。しかしその中にも，参照した諸記述中での『田園都市』の意味が其々多少の違いがあったとしても，『都市の過密解消』，『居住環境改善』，『中低所得層にも手が届く住宅の供給』，『コミュニティ活性化手段の提供』，『総合的デザイン』等の『**田園都市**の方針』が目標とされており，住宅地に関する『これらの目標達成の意識』と『**田園都市**／**田園郊外**としての認識』を明らかに確認することができた。第一次大戦中のEFCとUSHCの多くの住宅開発についても，住宅改革派を中心に都市部の居住環境の改善を念頭におき，英国の**田園都市**を模範として『**田園都市**の方針に沿い』計画された。それらは，総合的コミュニティ計画の新たな考えを持つ，将来の住宅開発のための先例たらんとしたものであった。

第一次大戦の終結後，これらの戦時の住宅開発は，それに携わった人々の住宅供給への政府の関与が継続して必要だとする想いとは裏腹に，民間に売却された。その後，彼らの内のF.アッカーマン，クラレンス・スタイン（Clarence Samuel Stein）やH.ライト等が，その想いを継続するためにRPAAを設立し，サニーサイド・ガーデンズ（Sunnyside Gardens）やラドバーン（Radburn）等の『米国の田園都市』が実現した。しかし第二次大戦後の都市では，近代化・工業化が求めた効率重視や用途純化を進める『アーバニズム』により非人間的だと感じる人が増えた。その反省から1970年代に始まったニューアーバニズムは，20世紀初頭の都市計画・都市づくりの概念やその実践に着目し，ハワードの**田園都市**論や近隣住区理論，当時のコミュニティづくりの実践等に学ぶ姿勢を示した。

この様に，英国の**田園都市**運動の『考えと手法』が米国に受け入れられ，**田園都市**の方針に沿う米国流の住宅団地が第一次大戦前後に建設され，更にRPAAがそれを発展させて『米国の田園都市』として実践したと考えられる。一方，そこで開発された考えや手法は，英国の第二次大戦後のニュータウン計画にも採用された。同様に，都市化が行き過ぎて街が非人間的になったと人々が感じた1970年代以降に，是正のための示唆をそれらに求めたのであった。即ち，ハワードの田園都市は今でも米国にとって「街に人間性を回復する」面で意義を持ち，影響を与え続けていると言える。

参考文献

1）E. Howard, edited with a preface by F.J.Osborn, *Garden City of To-morrow*, The M.I.T. Press, p.26, 1965

2）東秀紀等，*「明日の田園都市」への誘い*，彰国社, pp.166-168, 2001

3）Mary Corbin Sies & Christopher Silver, *Planning the Twentieth-century American City*, The John Hopkins University Press, p.21, 1996

4）内務省地方局有志，*田園都市と日本人*，講談社学術文庫, 1980年

5）Edgar G. Adams Jr. *Wartime Housing from 1917-1918 and its Place in the American Planning Tradition,* ACSA annual meeting and technology conference, pp.628-634, 1986

6）http://www.chicagoparkdistrict.com/about-us/history/, 2015/12/08

7）東秀紀等，*「明日の田園都市」への誘い*，彰国社, p.167, 2001

8）Stanley Buder, *Visionaries & Planners The Garden City Movement and the Modern Community*, Oxford University Press, p. 11, 1990

9）ibid. , p. 28

10）間宏，*日本労働管理史資料集 第二期第一巻*，p .44、五山堂書店，1989

11）Stanley Buder, *Visionaries & Planners The Garden City Movement and the Modern Community,* Oxford University Press, p. 28, 1990
12）E. Howard, *Garden City of To-morrow,* The M.I.T. Press, p.26, 1965,
13）Ewart G. Culpin, *Garden City Movement Up-to-date*, Routledge, p.9 , 2015
14）Sir Raymond Unwin, *Nothing Gained by Overcrowding, with an introduction by Dr. Mervyn Miller*, Routledge, p.7 , 2014
15）Dennis Hardy, *Garden Cities to New Towns Campaigning for town and country Planning, 1899-1946*, E & FN SPON, p.95 , 1991
16）Michael Alexander Geerste, *Defining the universal city. The International Federation for Housing and Town Planning and transnational planning dialogue 1913-1945*, Taschenbuch, p.55, 2015
17）ibid. , pp.36-37, 2015
18）Mel Scott , *American City Planning since 1890: A History Commemorating the Fiftieth Anniversary of the American Institute of Planners*, University of California Press, p.90, 1969
19）José Simões junior, *The Town Planning conference (London, 1910) : International exchanges in the beginning of the Modern Urbanism*, 15th International Planning History Society Conference, p.9
20）Michael Alexander Geerste, *Defining the universal city. The International Federation for Housing and Town Planning and transnational planning dialogue 1913-1945*, Taschenbuch, p.65, 2015
21）Michael Alexander Geerste, *Defining the universal city. The International Federation for Housing and Town Planning and transnational planning dialogue 1913-1945*, Taschenbuch, p.64, 2015
22）Mel Scott, *American City Planning 1890: A History Commemorating the Fiftieth Anniversary of the American Institute of Planners*, University of California Press, p.90, 1969
23）Susan L. Kraus, *A Modern Arcadia – Frederick Law Olmsted Jr. and the plan for Forest Hills Gardens*, University of Massachusetts University Press, p.7-37, 2002
24）Howard Gillette, Jr., *Civitas by Design: Building Better Communities, from the Garden City to the New Urbanism*, University of Pennsylvania Press, pp.29-30, 2010
25）Davit Stradling, The Nature of New York – An Environmental History of the Empire State, Cornell University Press, p.133, 2010
26）Frederick L. Ackerman, *What is House? IV,* Journal of American Institute of Architects Vol.V 1917 Dec., pp.619-620
27）Michael Alexander Geerste, *Defining the universal city. The International Federation for Housing and Town Planning and transnational planning dialogue 1913-1945*, Taschenbuch, p.40, 2015
28）Mary Corbin Sies & Christopher Silver, *Planning the Twentieth-century American City*, The John Hopkins University Press, p.27, 1996
29）Electus D. Litchfield, *Yorkship Village, The American Review of Reviews 6, December 1919*, pp. 599-602, 1919
30）Laurence C. Gerckens, *Yorkship Village (Fairview), Camden, New Jersey*, Land Development / Winter 1996, p.40
31）Frederick Law Olmsred, Jr., *LESSONS FROM HOUSING DEVELOPMENT OF UNITED STATES HOUSING CORPORATION*, Monthly Labor Review 8, May 1919, pp.27-38
32）"HOUSE.....No.6192", The Commonwealth of Massachusetts, Legislative Research Council Report Relative to New Town, July 29,1970, p.144
33）Michael O'Brien, *John Nolen and Raymond Unwin: Garden City Collaborators*, Athens Journal of Architecture, January, pp.9-13, 2015
34）Susan L. Kraus, *A Modern Arcadia – Frederick Law Olmsted Jr. and the plan for Forest Hills Gardens*, University of Massachusetts University Press, p.35, 2002
35）ibid, , p.53, 2002
36）Mel Scott, *American City Planning since 1890: A History Commemorating the Fiftieth Anniversary of the American Institute of Planners*, University of California Press, pp.91, 1969
37）Elizabeth Edwards Harris, *Housing the wartime workers, UCLA Department of Art and Architecture*, p.1-2, 1995 http://corbu2.caed.kent.edu/architronic/v4n1/v4n1.02.html
38）Mary Corbin Sies & Christopher Silver, *Planning the Twentieth-century American City*, The John Hopkins University Press, pp.4-20, 1996
39）John E Bauman, *Community Building versus Housing Reform*, Pennsylvania History vol.68, no.3, Summer 2001, pp.301-303, 2001

図版出典

図1：
https://classconnection.s3.amazonaws.com/238/flashcards/1219238/jpg/chicago1334636891949.jpg, 2015/12/04
図2：http://publications.newberry.org/pullman/items/show/17
図3，5：筆者撮影
図4：Mel Scott, *American City Planning since 1890: A History Commemorating the Fiftieth Anniversary of the American Institute of Planners*, University of California Press, 1969
図6：United States Shipping Board EFHC, *Housing the Shipbuilders*, Philadelphia, PA. , 1920
図7：Michael O'Brien, *John Nolen and Raymond Unwin: Garden City Collaborators*, Athens Journal of Architecture, January 2015